

2023年小教区評議会役員研修会(6/24) 参加者からの質問と回答

—「役員研修会 ふりかえり」からの質問 原文—

■ミサの中で聖書朗読、共同祈願などの一部を外国語で行っているとお話がありましたが、テキストは自ら作られているのでしょうか。また、日本人信者の受け止めかた、良くなったと思っていること、課題があると思っていることなど奇譚なく分かち合えているのでしょうか。

■鶴山神父様は、外国語ミサに出ながら日本語ミサにも出る外国人信徒がいる、と話されました。日本人のいろんな人が(例えば役員も順番に)、外国語ミサに出るようにすると良いように思います。そのような試みがあるか、どんな違和感や楽しさがあるか、パネラーの神父様、シスターがたにお尋ねしたいです。

■ブルーノ・ロハス神父の話そうとされた信徒リーダーの養成とはどういったものですか？聞き取りにくかったので、逆に聞いてみたくくなりました。

■外国における教区(教会)運営の方法。日本流の教会運営活動に参加頂く事は可能か？

これらの質問から、パネラーの司牧者に以下のような質問を送り、ホセ神父、鶴山神父、Sr.信田、名張教会役員より回答をいただきました。以下に回答を記載します。

①多言語ミサ、国際ミサの外国語の聖書朗読、共同祈願などの準備はどのようにしていますか？

国際ミサを行う場合、日本語ミサ式次第で行う。多言語ミサ、国際ミサの時は、プロジェクターを使用して式次第を映し出し、ミサの進行を見て慣れるように努力している。

大きな祝日は国際ミサで行い、聖歌、朗読、共同祈願は多言語多文化で行っている。(ホセ神父)

1ヶ月前に、役員が朗読者と共同祈願者を決めている。

聖歌は一週間前に外国人と日本人と一緒に練習している。(名張教会)

・伊勢の場合、第一日曜日はベトナム語の朗読や歌、第二日曜日は英語の朗読、そしてタガログ語や英語の歌の奉仕を御願ひしています。

・松阪の場合、第4日曜日は英語のミサのみ(日本語ミサはありません)。日本人を含む他の国の信徒の方も参加しています(鶴山神父)

・第一朗読は日本語、答唱詩編は英語、第二朗読はベトナム語、というようにいくつかの言語を使っている教会があります。事前に担当者に依頼しておきます。ただし、誰にでも突然ミサに参加できない事態は想定できますので、その際に寛大に対応できる広い心を持つことが大切でしょう。「〇〇さんに頼んだのに勝手にミサに休んだ！」と批判し合うことのないように……むしろ代役をいつでも見つけられる関係作りが大切でしょう。

・ただ多言語のミサの式文が各小教区で手に入らない場合、(若い人であれば)インターネットで検索して手に入れることができるので、ミサ式文の入手方法も併せて確認する必要があります。

・なお、日本語の朗読だから日本人が、英語の朗読はアメリカ人が、と決めることはないでしょう。日本人が英語の朗読に挑戦したり、外国人に日本語の朗読をお願いし、共に言語を学び合うこ

ともできます。ミサの終わりに短い時間でも外国語の勉強会（朗読の練習会）を開くことで信徒同士の交流にもつながるでしょう。

- ・またミサの歌も、いくつかの外国語の歌を歌っている教会があります。日本人にはカタカナを、外国人にはローマ字を表記すれば、共に歌うことができるでしょう。当面は外国人（共同体）に歌ってもらい、少しずつ信徒全体で練習し合うことで交流も深まります。（Sr.信田）

②-1 多言語ミサ、国際ミサに対する日本人信徒の受け止めは(反応)は？

日曜日のミサは日本の典礼に則ってミサをしてきたので、国際ミサになれば典礼が多言語多文化になるとミサに集中できないとの意見がある。（ホセ神父）

お互いに友好的で受け入れ体制が出来ている。（名張教会）

- ・伊勢はベトナム人の青年たちやフィリピン人の女性たちが奉仕していることを喜んでいますが。「生き生きしていいじゃないか」。
- ・松阪の英語ミサも説教の時、日本語もありますから、普通に参加しています。ただ、若干、参加が減るのは、「英語だと分からない」という日本人の信徒の方の気持ちの表れかもしれません。（鶴山神父）

・よくあることですが、日本語のミサというと日本人だけが参加し、英語のミサというと外国人だけが参加する傾向があります。（フィリピン人の司牧担当の私は）外国人が、自分たちが（比較的）理解しやすい言語のミサに与りたい気持ちは理解しつつも、それでも「ミサの本質は言語に左右されない」ことをいつも強調し、外国人にも日本語のミサに参加するように呼び掛けています。ただ、日本人が多言語ミサや国際ミサについてどう考えているかは千差万別だと思います。日本人信徒にとって「理解できる言葉」という意味では、日本語のミサが一番であることは事実です。そのため外国語が混じると「理解できない」部分があり、なかなかミサに集中できないという声を聞きます。しかしミサに共に与っている人に関心を持ち、それぞれの役割を楽しみ合うという姿勢があれば、多少日本語の発音が明確ではない外国人にも寛大な心を向けることができるでしょうし、最初は意味が分からなくても、教会内の多様性をそれぞれの文化や信仰表現を理解し合うことで自分の信仰を深めることができるかもしれません。どちらにしても急に変わることはできないので、少しずつ多言語ミサや国際ミサ経験を積み、それぞれの感想を分かち合うことで、日本人信徒にも「与りやすいミサ」の形を見つけることができると思います。

- ・外国人の信仰表現に委縮してしまう日本人信徒もいるかもしれません。自分たちにはない信仰表現に戸惑ったり、羨ましがったりする日本人を目にしました。外国人の信仰表現は、「そのまま真似る」ためではなく、彼らの信仰の力の源から学び合うための材料として受け止め、日本人として自分たちならば何ができるか、を見つめていくヒントにしたらどうでしょうか。（Sr.信田）

②-2 実施して良かった点は何ですか？

現在の上野教会は 25 年前の日本人と一部の外国人信者が参加していた時代よりミサ等への参加者が増加してきている。これは上野教会が新たな外国人を受け入れるようになってきていることの表れであり、今後もさらに増加していくと思われる。（ホセ神父）

カトリック国の信徒の信仰心を学ぶことができる(名張教会)

- ・外国人は日本の教会の中で「役割」があることをとても喜んでいて、外国から来た来客としてただミサに与るのではなく、日本人と共にミサを「つくり上げている」という喜びは大切です。「迷惑かな？」と戸惑うよりも、どんどん「役割」をお願いすることで交流や理解が深まります。
- ・国際ミサ以外にも、ミサ後の掃除を一緒にしたり、お茶の時間を共にすることで信徒同士の交流を深め、ミサをより豊かにすることにつながります。(Sr.信田)

②-3 課題はありますか？

大きな壁は言葉、外国の方は日本語でテレビを見ているので日本語は少しずつ理解していると思います。外国語のミサ曲の時は、まったく分からないのでその間は離れている感じがする。回数が増えれば曲とかも覚えて一緒に歌えるようになり一体のなれると思う。

共同体が別々ではなくみんな同じ教会になるようになることが必要だと思います。

以前から国際色豊かな教会、土曜日日曜日に多言語のミサが基本、それぞれの言語のミサを大事にしながらみんなでするミサを増やしたい。(ホセ神父)

なし(名張教会)

- ・教会活動はあくまでも「自分ができることを喜んで奉仕する」ことです。誰か一定の人たちだけが忙しく、いつも同じ人が役割を担当していることは避けるべきです。朗読などは誰でも最初は上手いかないものなので、少しずつ、いろいろな人が経験を積むことで役割を分担し、多くの人に活躍の場を広げていく環境が必要です。
- ・小教区内に外国人共同体がなかったり、外国人が少ない場合、国際ミサに関心がない小教区があります。地区内の交流を利用し、他の小教区がどんな現状になるかを知り合うことも大切な国際交流だと思います。
- ・「うちの小教区は外国人の活動が盛んです」という小教区がありますが、外国人共同体と日本人信徒たちが十分に交流して「ひとつの教会づくり」をしているのでしょうか？それぞれの共同体が個々に活動しているだけの小教区もあります。小教区の評議員に外国人は含まれていますか？ 彼らの声の小教区の中で受け入れられる環境にありますか？(Sr.信田)

③-1 評議員などの日本人信徒が外国語ミサへの参加をうながすような試みはありますか？

主日のミサの時、担当者が各言語のミサ時間のお知らせをしている。(ホセ神父)

- ・ミサの最後に、あるいはミサ後に行われる口頭での「教会のお知らせ」を日本語だけではなく、英語で取り組んでいる小教区があります。インターネットの自動翻訳でもいいので、「外国人にもわかって欲しい」と思う気持ちは外国人にとって励ましになります。また、評議員の方が外国語のミサであっても「うちの小教区ではこんなことが話し合われています」といった小教区の現状を分かち合うと、外国人たちの帰属意識も高まります。お知らせの時間だけでもまずは参加してみてもいいですか？
- ・外国語ミサに参加経験がある日本人信徒が、外国語ミサがどんなミサであったかを日本語のミサに来ている日本人信徒に報告することもお互いの理解を深めることにつながるでしょう。互いに双方のミサに招き合う関係を築いていくことができればと思います。(Sr.信田)

③-2 どのような違和感や楽しさがありますか？

国際ミサにしても、すぐには大きな多文化交流はできないと思います。まず、顔を見合わせないと私たちの教会のメンバーかどうかわからない。みんな一緒に交流することによって土曜日にミサに来る共同体、日曜日に来る共同体が別々ではなくみんな同じ教会になるようにすることが必要だと思います。(ホセ神父)

言葉の壁は大きいですが、外国語できる人が積極的に関わってくれるので、楽しくミサに参加することが出来ている。(名張教会)

今年はフィリピンの教会で5月に祝われるフローテス・ヨ・マヨを行いました。一部、日本人の信者さんからは「びっくりした」≡正直、落ち着かなかったです、という声はありましたね。(鶴山神父)

信仰共同体を築いていくことに「これが正解」というものはないと思います。どんな違和感でもその小教区の中で、あるいは他の小教区との分かち合いの中で向き合って改善していくことが大切ですし、楽しさも分かち合うことで新たな取り組みを見出すきっかけになるでしょう。各小教区で現状が違うと思いますので、他と比較するのではなく、自分たちの小教区の現状を見つめることから始めることが大切ではないでしょうか？(Sr.信田)

④外国における教会運営の方法はどのようなものですか？

毎月国際協力部の部会を開き、各共同体の報告を出し合い、コミュニケーションを大事にしながら強い一つの共同体を作り上げられたらと思います。(ホセ神父)

維持費を出さなくても、(ミサ中)献金で教会のためにサポートしてくれています。(名張教会)

各国によって様々です。ただカトリック信徒が大半を占めるフィリピンのようなカトリック国の場合と、日本のようにカトリック信仰が小規模の国では比べる必要はありません。それぞれの現実から教会運営の方法を見つけていけばいいと思います。(Sr.信田)

⑤外国籍信徒に、日本流の教会運営活動(評議会や行事など?)に参加してもらうことは可能だと思いますか？

評議員は多国籍共同体で構成されてきている。日本流の行事より多国籍多文化の行事の方が多くなっている。(ホセ神父)

もちろん、参加している。(名張教会)

よく理解していただいているのであれば、可能だとおもいます。(鶴山神父)

最初は日本人信徒と外国人信徒の双方に戸惑いもあるかと思いますが、十分に可能だと思います。ただ評議会や話し合いは日本語になるとしますので、外国人がしっかりと理解しているかを確認しながら活動を進めてください。

日本人の習慣や思考に戸惑う外国人もあるでしょう。その際は補足の説明を加えたり、彼らにも十分に発言できる環境(わからないときはわからないと言える環境)を大切にしてください。

(Sr.信田)